

米原歴史文化街道

米原市の歴史・文化財を歩く 100

地域とともに歩む資料館

— 伊吹山文化資料館の場合 —

一五周年記念イベント

廃校に子どもたちの元気な声が戻ってきた。五月二六日、伊吹山文化資料館（春照七七番地）では、開館一五周年記念「資料館まつり&シンポジウム」が開催され、二四〇人を超えるみなさんが、昔の暮らしや江戸時代のかご乗り体験、太陽の観察やクイズラリー、地域の食材を使った模擬店を楽しみました。これは、資料館友の会やママさんサポーター、



▲ 資料館まつりの様子

県内の博物館関係者などの協力で開催できたものです。シンポジウムでは初めて外部の方の評価を伺うことができ、地域のみなさんに支えられていることを強く実感しました。

伊吹山文化資料館は地域のお年寄りの方による「友の会」のサポートで活気に満ちています。同館は平成五年に廃校になった春照小学校春照分校を改修し、「ガラクタ」とも言える古民具にスポットを当て、同一〇年にオープンしました。主な事業は歴史資料の収集、保管、貸し出し、伊吹山の自然と歴史について特化した企画展。このほか、子ども向けの体験教室や大人向けの歴史講座など。入館者は開館以降、コンスタントに年間五、六〇〇人を推移。この数字は旧伊吹町の人口とほぼ同じで、昨年度までに七万七八三三人に来館いただいています。伊吹山麓スポーツ文化振興事業団が米原市から指定管理を受けており、市の文化財担当

課の指導で、企画展はこれまで一〇〇回開催。少人数のスタッフで、運営できるのは「友の会」の支援によるものと言えます。

資料館友の会

「友の会」は開館準備段階から館の企画、運営に関わっていただき、現在、二六人が登録。平均年齢は八〇歳ですが、現役時代の技を生かした「モノ作り名人」や昔のことをよく知っている「おばあちゃん先生」がいて、子どもたちの体験活動などをサポート。また、窓口業務や清掃活動などをこなし、昨年度だけで延べ六一三人が参加しています。

なぜ、このように会員たちは精力的に館の運営に加わっていただけるのか？ 藤田慶一会長は『「したる」『やつたる』ではなく、『やらせてもらう』ことで喜びを感じ、協力させてもらっている』と述べ、「伊吹山に誇りがあるから、それを後世に受け継いでほしいだけ」と話されています。

一般的に資料館には国の重要文化財などを展示する「中央型」、観光地の中核施設となる「観光型」、地域の歴史資料を展示する「地域型」の三つのタイプがあります。地域型には「放課後博物館」と「遠足博物館」があり、伊吹山文化資料館のような「地域・放課後型」は日常的な暮らしに密接に関係し、その地域の人たちの思いがつまっています。伊吹山文化



▲ 太陽の観察

資料館は敷居が低く、来館者にやさしさを与えています。また、「伊吹山麓の歴史と自然」というコンセプトがブレることなく、守備範囲を明確にしています。古民具は昔の人にとって、当たり前のようなモノばかりですが、「友の会」の昔話や解説などで付加価値をつけています。「ハコものを作ったらゴール」という考え方は、廃館という末路を導くことになりません。

今回の内容は、シンポジウムのパネラー丹部 均氏（滋賀夕刊新聞社）の論説を参考にさせていただきます。丹部氏から「資料館は料理と同じ、上手なシェフにかかれば、B級グルメもA級グルメに近づける。館とサポーターが対等で、みんなが学芸員という考え方で、さらなる発展へ、関係者の努力が期待されている」とエールを送っていただきました。

（歴史文化財保護課）